

作物名：麦類

病害虫名：さび病 黒さび病（病原：*Puccinia graminis*）
 黄さび病（病原：*Puccinia striiformis*）
 小さび病（病原：*Puccinia horiana*）
 赤さび病（病原：*Puccinia triticina*）

1 被害の特徴と診断のポイント

- さび病に共通した病徴は、葉や茎に鉄さびの色をした、盛り上がった粉質の斑点ができ、のちにそれが黒褐色に変化することである。盛り上がったさび色の粉は夏胞子で、それが集まってできた斑点が夏胞子層である。ムギが成熟するにつれて、夏胞子層のあとや周辺部に、黒褐色の斑点（冬胞子層）ができる。
- 被害は、穂数と一穂粒数の減少、粒重の低下で、20～30%の減収となる。さらに粒質その他にも著しい影響を及ぼす。



写真1 オオムギ小さび病



写真2 コムギ赤さび病

さび病の比較

種類	発生時期	主な発生部位	夏胞子層	冬胞子層	寄主となる麦種 ※
黒さび病	晩期	葉、稈	濃褐色、大型、散在	裸出する	オオムギ、コムギ
黄さび病	早期	葉	鮮黄色、小型、条斑	裸出せず整列	オオムギ、コムギ
小さび病	中期	葉	赤褐色、小型、散在	裸出せず散在	オオムギ
赤さび病	中期	葉	赤褐色、中型、散在	裸出せず散在	コムギ

※オオムギ、コムギに関してのみ記述

2 伝染源・伝染方法

- 夏胞子と冬胞子を形成する絶対寄生菌である。病原菌は収穫後、こぼれムギに感染して夏を越し、秋に播種されたムギに感染する。そして夏胞子または植物体内で菌糸の形で越冬し、春の第一次伝染源となる。

3 発病しやすい条件

- 暖冬で多雨、窒素の多施用により軟弱な生育をしている場合。

4 防除方法

(1) 耕種的防除

- ほ場周辺のこぼれムギを取り除く。
- 抵抗性品種を作付けする。
- 適期に播種し、窒素の多施用を避ける。

(2) 化学的防除

- 初発生を確認したら、直ちに薬剤防除を行う。

5 出典

(1) 参考文献

- みやぎの麦類・大豆栽培技術指導指針（宮城県）
- 農業総覧 原色病害虫診断防除編1（農文協）
- 農業総覧 病害虫防除資材編1（農文協）
- 植物防疫 第73巻第2号:44-50（日本植物防疫協会）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影

（令和5年9月改訂）